夏休みを考える

——沈黙と空白の意味——

本田和子

能舞台の空白について、増田正造氏は次のように語っている。

——能が終ったというのではない。戯曲が一応終結する。シテは留拍子をふたつ踏む。一番の能はまだ終っていない。

シテは橋懸りを歩んで揚幕のかなたに消える。他の登場者も、囃子方も地謡も、いつの間にかいなくなる。舞台は雄渾に描かれた老松だけを残して、またもとの空白にもどって静まる。

（中　略）

空白の能舞台は、引幕の考案される以前の原始形態ではなく、根源的な深い意味を持っているのだと私は思う。無に回帰して再び有を生む、無限の時間への思惟がこめられていると思う。——

新しいものの創造にかかわる沈黙と空白の意味を、よく物語ることばである。一つの営みが終って、次の営みが始まるためには、今までのすべてを無に帰す一瞬が必要である。よみがえるためには、人は死なねばならないのだ。

古い時代の物語の数々は、新生にかかわる人間のちえを象徴的に示している。「他界訪問説話」の多くはこれであるし、これらの物語を「死と再生」のテーマでとらえることも可能であろう。

ここでは、わが国の古説話の中から、典型的な例の幾つかをあげながら、古代人のちえを探ってみることにしよう。

◆　◆　◆　◆

古事記の中に、オオナムジノカミ（大国主命）の「根の

国」訪問の物語が記載されている。オオナムジは兄神たちの嫉妬によって、しばしば生命をおびやかされていた。それを憂えた御祖（母神）は、オオナムジを旅立たせることにした。スサノオノミコトを頼って「根の堅州国」へ行かせたのである。「根の国」は「黄泉の国」ともよばれ、死者のおもむく所である。したがって、オオナムジは「死の国へ旅立った」ということになる。葦原の中つ国におけるそれまでの生を、ひとたびは否定したということになろうか。

「根の国」で彼を待ち受けたのは、スサノオによって与えられたさまざまな試みであった。蛇の室、蜂と百足の室、あるいは火のわざわいなどをかろうじてくぐり抜けたオオナムジは、スセリヒメという愛人と手を携え、「生大刀、生弓矢、天詔琴」という三種の宝器を手に入れて「根の国」から逃れてくる。逃げていくオオナムジに向かって、スサノオは次のように呼びかけている。すなわち、「お前は、その宝器を使って、兄神たちを討ち従え、国の主となるように。そして出雲の国に大きな宮殿を建て、スセリヒメを妻として暮すように」

以後、彼は大国主命とよばれて、出雲の国の国作りに励むこととなった。

この物語は、オオナムジ（あるいはアシハラノシコオ）とよばれていた一人の若者が、大国主命として生まれ変わり、知力・武力・政治力を身につけた一人前の男性として、新生の第一歩を踏み出すまでの過程を示している。「人の成長にかかわる古代的イメージ」が、象徴的に形象化された物語ということができよう。

オオナムジが「根の国」に滞在していた期間中、彼はこちらの世界には不在であった。すなわち、彼の存在は沈黙し、空白の期間を持ったわけである。その空白期間中に、彼は新しい自分を創り出したのであった。

新生のための準備（さまざまな試練）に、一人でいどみ、それらをくぐり抜ける。これが成長のための必須条件ということになろうか。人が真実に新しくなるための覚醒は、純粋に個の次元に成立する体験として、孤独のうちに訪れるということでもあろう。

オオナムジは、ミオヤノカミのもとをはなれて「根の国」へ行くという形で、日常的な生活のきずなを一応断ち切った。これは、彼が自分自身の心的空間に一人で閉じこもったことを意味すると考えてもよい。その心的空間に成立し

た体験において、彼は真に新しい自分をみつけ出したのである。

◈ ◈ ◈ ◈

よく知られた昔話の一つに、「わらしべ長者」の物語がある。一本のわらが次々とより価の高いものに変化して、ついには大きな幸せにつながるという段々ばなしの形式が興味をそそって、多くの人に親しまれてきた。

これは、「長谷寺霊験記」として、「今昔物語」等に採録されている。長谷寺は、古い時代の人々にとって、「夢を授ける聖所」であった。人々は、人間のちえでは克服し難いと思われる悩みや迷いからの解脱を、夢のお告げに求めて長谷寺にこもったのである。

「夢告」に従うことによって、人々の前には新しい道が開けた。ということは、当時の人々にとって、「夢告」が単なる夢やそらごとではなく、夢もまた一つの「うつつ」、すなわち現実と等価の体験として受けとめられていて、それゆえに夢の中で与えられた解決の指針が、現実を支配するに足るものと考えられていたことを示している。したがって、よい夢を得ることは、よい運命を与えられることと同義であった。だからこそ、「わらしべ長者」の主人公は、「夢のお告げが得られるまではここを動きません。もしお助けがなければ、ここで餓死するつもりです」とばかりに、観音の前に二十一日間も参籠し続けたのである。

夢を「うつつ」ととらえた古代的な世界認識を、未開なアニミズムと批判することはやさしい。しかし、これらの物語を通して、合理的知性を超えた古代人のちえを汲みとることこそ肝要ではないか。

夢をみているとき、人は別の世界にいる。私たちが日常的な現実とよんでいる目覚めた意識の世界から一時身をかくして、眠りの世界の住人となるわけである。古代人が、夢を得ることによって、新しい運命をつかまえたという多くの伝承は、現実を超えたもう一つの世界の重要性を物語っている。日常的な生活の側からみれば、夢とは、現実的な生が一時遮断され、沈黙と空白の中に沈みこむことである。人が、自身の新しい生を洞察するためには、それら沈黙と空白のときがいかに重要であるかを、古代人たちは体験的に知っていたのであった。

◈ ◈ ◈ ◈

私たちにとって、夏休みは、日常的な現実の一時的な遮断ではないだろうか。子どもからはなれ、職場の同僚からも遠ざかって、一人で自由に使える時間の中に浸り切る。保育者としての日常が、子どもとの出会いの中で慌しくすごす時間の連続であることを考えるなら、お休みは「保育者的な生」にとって沈黙と空白のときである。しかし、この空白期間は、それぞれが自分をよみがえらせる体験のときとして、私たちの前に置かれているのである。

他人との交わりもできるだけ避けて、一人だけで沈黙のときを過ごすことも許されているし、日常生活をおきざりにして旅に出ることも可能である。一学期の間、体中で受けとめておいたさまざまな保育体験を、それこそゆっくりと意識の明かるみに浮かび上がらせ、言葉として整理してみることもできよう。もちろん、本も読まず旅にも出ず、保育の整理など何一つせずに、ただのんびりと何もかも忘れて暮すことも、一つの大切な過ごし方であろう。何しろ、誰にはばかることもない、夏のお休みなのだから。

お休み中の時間は、純粋に自分に属す「とき」として使うことができるし、また、そう使うべきではないだろうか。平常の時間は、生活の秩序や職場のきまりを明らかにするものとして位置づいている。たとえば、八時までに出勤、九時から保育開始、保育時間は四時間半、などというように。しかし、お休み中の時間は、「私のために」流れる。「私」が、「私」に属する時間をとりもどすのである。

◈ ◈ ◈ ◈

大鼓の名手、川崎九淵氏は、現代の録音機械が、大鼓の音と音との間の沈黙を、充分に録音し得ないことを不満としていたといわれる。「間」の静寂こそ、大鼓の生命であるという。

長い沈黙の後に「ハッシ」と一つ鼓が打たれ、再び、長い沈黙が支配する。沈黙が音を生み出し、生み出された音がまた新たな沈黙を生む。音を生かすために「間」があるのか、静寂を区切るために音があるのか。このような、静寂と音との緊密な相互関係を、機械は充分に伝えきることができないというのでもあろうか。

M・ピカートは、「沈黙と言葉は密接不離の一体をなすものだ」という。それゆえに、

「もしも言葉に沈黙の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまう」のである。

私たちの生活も、沈黙と空白の背景がなければその深さを失ってしまうのではないか。

「夏休み」この沈黙と空白のときを、私たちは、自身の新たな誕生のために用いるべきである。それでこそ、九月の朝、「以前よりもっとよい先生」として子どもたちの前に立つことができるのではないだろうか。

――おお、やわらかい褥のなかより
夢みつつ、なかば耳を傾けよ。
私の奏ずる絃のしらべに
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

私の奏ずる絃のしらべに
星々の群は
永遠のおもいを祝福する。
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

永遠のおもいは
いや高く、神々しく、
私を現世の喧噪の巷よりたかめる。
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

現世の喧噪の巷より
きみは私をつれなくも隔て、
私をこの冷気のなかへと遠ざける。
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

私をこの冷気のなかへと遠ざけ、
ただ夢のなかで耳をかす。
おお、やわらかい褥のうえに
眠れよ。さらに何を望もうとするのか。

――ゲーテ「夜の歌」――